

勝央美術文学館が顕彰する

作家岡本綺堂と出版人岡本経一 略歴

岡本綺堂（二八七二―一九三九）

岡本（森部）経一（一九〇九―二〇一〇）

明治5（一八七二）年11月15日（旧暦：10月15日）、東京・高輪の旧徳川幕府御家人の家系に生まれる。本名敬二。幼い頃から漢詩や英語を学び、その語学力を、生涯の創作の材料として役立てた。東京府尋常中学在学中に、劇作家になることを決意。卒業後の明治23年入社 of 東京日日新聞社を皮切りに、様々な新聞社で記者・劇評家として活動する傍ら、小説や戯曲を執筆した。

明治41年、川上音二郎に依頼され、二代目市川左團次一派に「維新前後」を書いたのを機縁として、以降、左團次に当って多くの戯曲を書く。「修禅寺物語」などの史劇、「鳥辺山心中」「番町皿屋敷」などの悲恋物は、新歌舞伎の代表的演目として、現在も上演されている。

大正2年以降は執筆活動に専念。推理物『半七捕物帳』では、捕物帳というジャンルを創設するとともに、物語の中に江戸の情緒と風物を瑞々しく描き、また「モダンホラーの先駆け」と言われるほどの怪奇小説の名手であり、『青蛙堂鬼談』など怪奇物も長く読まれている。

後進の劇作家志望者を育てるため、昭和5年、雑誌『舞臺』（ぶたい）を創刊。門下には多くの作家が出ており、大村嘉代子、中野實、岸井良衛、北條秀司らの他に、勝央町出身の額田六福、下山省三がいる。

勝央町出身の出版人岡本経一は養嗣子。

昭和14（一九三九）年3月1日66歳で逝去。



明治42（一九〇九）年3月25日、勝間田町（現勝央町）岡に生まれる。旧姓 森部。郡立勝間田尋常高等小学校卒業後、上京。同郷の劇作家 額田六福の紹介で岡本綺堂家の書生となる。子どものなかった綺堂夫妻は、実直な経一に岡本家の後を托し、昭和12年、経一は正式な養嗣子となり、最後の綺堂門下生として受け入れられた。

綺堂の死後、戯曲を対象とした文学賞「岡本綺堂賞」を立ち上げるも、太平洋戦争のため途絶。自らも応召され中央アジアにて抑留される。戦後、妻の疎開先である鳥取に復員し、岡本家の先行きを案じた六福に急がされ再び上京する。出版社〈青蛙堂書房〉を立ち上げるが倒産。綺

堂の七十七回忌の昭和30年に出版社〈青蛙房〉を再び立ち上げる。

本の製作では、企画、編集、校正をすべて自分で行い、昭和42年、江戸時代風俗研究書の出版活動が認められ、第15回菊池寛賞受賞。また、平成元年には、『岡本綺堂日記』、特に続編の「綺堂戯曲年表」が評価され、第24回長谷川伸賞を受賞。

「物を作るといふことに興味を持ち、創造することを愛し、そして後生へ良い物を残していく」という信念を持って出版業に取り組み、その業績は、日本のプライベートプレスの先駆けと評される。

平成22（二〇一〇）年11月15日101歳で逝去。

